

街を編む

神田川流域で再編されるスポーツの帯

神田川は西東京の様々な街を通り、公園が川に沿って連続して存在するスポーツのポテンシャルが高い場所である。そこで、公園と川の一体的な再編を行うことで、スポーツの障壁を取り除き、様々なアクティビティが行えるようにすることで神田川沿いをスポーツの帯として価値づけたまちづくりを行う。



01 BACKGROUND 高まるスポーツ志向 / 公園利用の低調

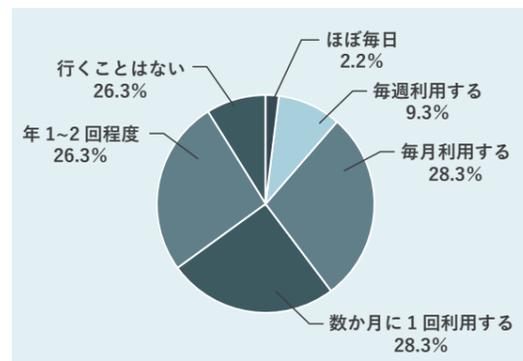
スポーツへの関心の高まり

近年、様々な観点からスポーツは多様な形で注目を集めている。屋外で行う日常的な運動が浸透しているのに対し、多くのスポーツが特定の場所や施設に限定されて行われている。都市の中で気軽に身体を動かせる環境は限られており、スポーツへの関心が広がる一方で、それを受け止める都市空間が十分に整っていないのが現状である。



都民による公園の利用度

東京都には約 8,300 箇所もの都市公園が存在しており、我々にとって身近な存在といえる。しかし、依然としてこれらの公園を日常的に利用する人は 1 割程度と少なく、公園は「近くにあるが、行かない」存在である。

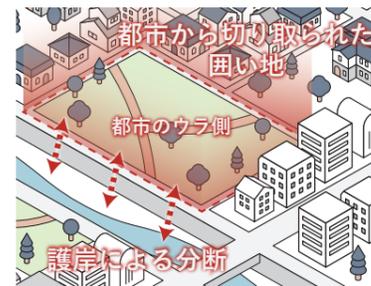


「令和 4 年度 インターネット 都政モニターアンケート」より

02 SURVEY 日常のウラに隠れる緑の島

① 場所性：都市との隔絶

現在の都内に位置する都市公園は、住宅街や市街地との物理的・機能的連関を欠き、切り取られた囲い地のように心理的な分断が存在する。また、護岸された河川と隣接することが多く、立地的な分断が起こる。

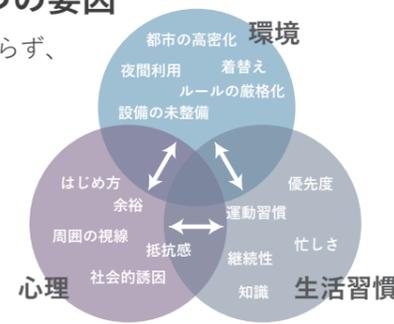


② 社会性：スポーツをしない 3 つの要因

スポーツをしない要因は都市的なものに留まらず、

- ・空間や設備の不足による環境的要因
- ・周囲の視線への意識といった心理的要因
- ・運動習慣の欠如や忙しさによる意欲の低下といった生活習慣的要因

が挙げられ、これらが複合的に作用し、日常的にスポーツをしない現状を生み出す。



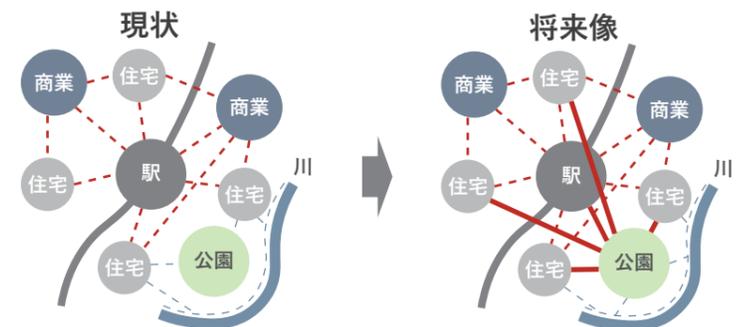
03 CONCEPT スポーツがにじむ生活景の創出

① 日常的なスポーツ利用の促進

通勤や散歩、昼休みや放課後など、特定の施設や時間に依存しない生活動線上で自然に身体を動かす機会を生まれ、スポーツは「日常の風景」となる。

② 公園が都市のオモテへ

これまで裏側に位置づけられてきた公園を、都市の表舞台＝「オモテ」に開く。川辺や街路との連続性を高め、都市活動の延長線上に公園を再配置することで、人々が通り抜け、集い、動く「開かれた空間」として再構築する。



04 SURVEY 敷地分析：150m 間隔にある公園

対象地：神田川沿いの公園
(井の頭公園～早稲田区間)

神田川は井の頭池を源流とし、三鷹・杉並・新宿などの東京西部の個性豊かな街を横断して隅田川へ注ぐ都市河川である。地域ごとで自然・文化・生活の表情を変える一方で、水質悪化や護岸のコンクリート化による親水性の喪失が問題となっている。近年では、多様なまちの魅力を活かす親水空間の形成が求められる。

神田川沿いのまちにおけるスポーツポテンシャル

吉祥寺

公園文化 × ウェルネス都市



生活文化と一体化したウェルネス・スポーツ都市。自然・カフェ・公園を繋ぐ「余白的運動空間」としての価値がまち全体に広がる。

高井戸

住宅地 × 緑道ネットワーク



住民の健康・防災・福祉を支える生活型スポーツ拠点となる。高齢者・子育て層の身体活動を支える安全で身近な運動空間。

中野坂上

再開発 × コミュニティ形成



再開発地区の広場や河川沿い空間を「アーバン・フィットネスゾーン」とすることで、ワークライフスポーツバランス都市への期待。

高田馬場

アカデミック × 多文化性



大学生・留学生・地元住民が交わる国際的なスポーツ拠点。身体を動かすという体験を介して知と多様性を結ぶハブになり得る。

吉祥寺

自然と文化、商業が調和し、幅広い属性が集まるまち。生活利便性と井の頭公園の豊かな緑が共存している。

高井戸公園

神田川沿いの防災と自然が融合した新しい都立公園であり、地域の運動・憩い・避難の機能を兼ね備える拠点。

スポーツ用途

誰もが日常的に体を動かせる健康志向型の都市公園として開園し、2024年に競技用のサッカー・テニスコートなどが追加開園した。

落合中央公園

地域で数少ない「広域型の運動空間」。古くからある公園のため、設備の一部が老朽化し、バリアフリーが限定的。

スポーツ用途

競技用スポーツ利用が中心である。公園内に広場があるものの、多世代向けの整備がされておらず、運動・利用方法に偏りがある。

高田馬場

学生を中心とした若者と外国人が行き交う多文化都市。学問・音楽・エスニックが交差する活気のあるまち。

中野坂上

新宿に近い準オフィス拠点都市。再開発によって企業・転入者中心のまちとなり、地域らしさの維持が課題。

井の頭恩賜公園

東京都を代表する「都市のオアシス」として位置づけられ、若者から高齢者まで幅広い層が利用している。

スポーツ用途

井の頭公園西園がスポーツゾーンの中心拠点として整備されている。緑道や広場も多く、ジョギングやヨガなど日常的な運動も行われている。

神田川の歴史

自然河川から人工水路へ



1600- 江戸城下の水不足を解消するために神田上水として整備。生活用水・農業用水・防火用水などに活用した。

治水と都市拡張のため「制御された川」



1900- 都市化による洪水被害の増加に伴いコンクリート護岸化が急速に進み、安全性と引き換えに親水性を失う。

環境再生と「見る川」への転換



1970- 高度経済成長期以降、排水の流入により水質が悪化。公害対策や下水道整備の進展により、水質改善が始まる。

再生と共生と文化の軸へ



2010- 住民参加型の清掃活動やイベントが定着し、コミュニティ形成を担う「多層的な公共空間」として進化する。

凡例

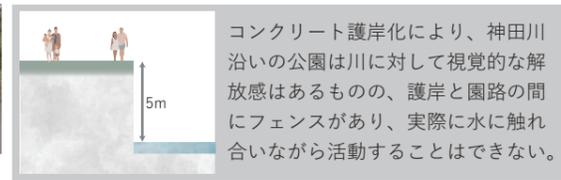
- 神田川
- 公園・緑地
- 鉄道
- 街と属性

高井戸

ファミリー層を中心とした定住者率が多く、生活利便性が高い。神田沿いの自然と密着した閑静な住宅街を形成。

05 SURVEY 神田川沿い公園の分析

水辺と公園が断絶し、親水性が欠如



神田川沿いの小規模公園・緑地の「用途不明化」



神田川沿いには短い間隔で小規模な公園・緑地帯が多く存在する。しかし、これらの空間はペントと砂地だけの用途未定空間であったり、利用者が少なく、昼間でも静まり返っている現状がある。空き地があるだけでは何をしようのかわからず、スポーツに興味ない人には使いにくい場所となっている。

多種多様な人々のスポーツを育む場へ

06 PROPOSAL 公園と川の空間の再編により生まれる“スポーツの帯”

川と公園を繋ぐ空間操作と休憩所の設計

以上の分析から公園と川の両方にアプローチすることが必須であり、いくつかの公園で拠点となる休憩所を設計し、敷地を整える

いくつかの公園を介したスポーツの方向性



休憩所が拠点となり、属性が異なる人のいる街でスポーツの種類の特徴が出てくる。そうすることで「ただの公園」が「〇〇スポーツの聖地」として街が盛り上がる

様々な分野のスポーツが振興され生まれるスポーツの帯

様々な属性の人がいる神田川流域でエクササイズからアーバンスポーツまで分野の異なるスポーツの拠点となる街ができていく。それらを神田川が繋ぎ、イベントを行うことで都市の裏側だった神田川が、スポーツの側面では都市の表側となり人々に認知されるようになる



神田川一体で“スポーツの帯”として認知され盛り上がるように

07 PROPOSAL 公園の新たな拠点

スポーツの拠点となる休憩所

拠点に求められる機能として、現状のトイレや水飲み場だけではなく、ロッカーや休憩所、防犯の面では明るい場所が求められる。約20%の人が施設が無くスポーツができないという現状である



安全性や不十分な施設

運動をしない理由ランキング	
家族が動めない	34.8%
一緒に運動する人がいない	27.0%
時間がない	25.9%
施設がない	20.6%

2023年「SRC スポーツの実施状況に関する調査」より

川と導線を引き込む計画

川と並走する道路から道を引き込み、公園内のタータントラックや導線に引き込む。また、引き込むことで生まれた場所を親水空間としてデザインする事でポケットができ、空間が生まれる。休憩所が川沿いを走る人の「中継所」となり連携が生まれる。



公園や既存の拠点との連携

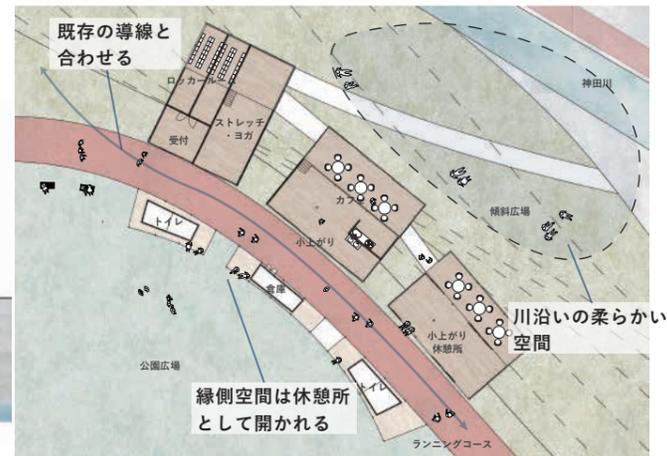
多くの人々が「家から公園へ」という流れをたどるが、提案では「家や駅から公園、公園から公園へ」というように柔軟な利用に対応する施設となる。公園の既存の施設と連携し、一帯で「〇〇スポーツの街」と押し出すことで、総合すると神田川がスポーツの帯となる



08 PROPOSAL 具体的な提案像と空間

フィールドプラン

提案の一例を示す。川沿いの道と公園内の道を組み合わせ、そこに休憩所を配置する。生まれる起伏はスポーツの利用の多様化を生み、休憩所は縁側空間を用い、誰もが気軽に利用できる



具体的な空間

- ### 1, 公園では底になり子どもたちの休憩所になる



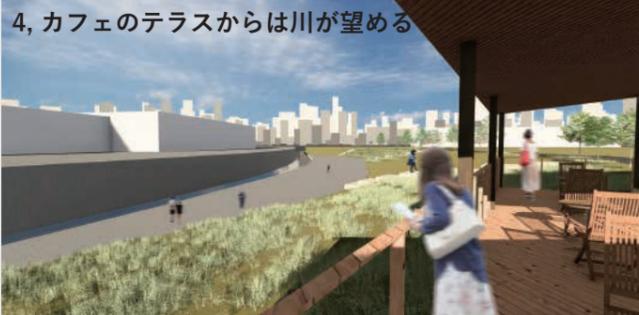
提案では元々利用していた地域の子どもたちの休憩所にもなる。温暖化による熱中症が増えた今、気軽に休む場所が公園内に求められている
- ### 2, 夜間は拠点の光や警備員によって安全性が増す



夜間川の周囲は暗く、独りでスポーツを行うには不安が残る場所だったが休憩所の光や警備員の在中心により安心してスポーツに臨める
- ### 3, 川沿いのエリアはスケボーなどのアーバンスポーツに



川沿いのインフラ空間はコンクリートの地面となってしまうが、アーバンスポーツとの相性が良く、スケボーやダンスが行われる
- ### 4, カフェのテラスからは川が望める



運動しに来た人や地域の人の休憩所であり、将来ここでスポーツの大会が行われるようになったとき、ここが観客席となる

09 VISION スポーツのより繋がる街と競争社会を育む将来像



展望

